

学習法から教授・学習知識へ：  
教員養成課程専門科目における学習者の意識の変容

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亘理, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009177">https://doi.org/10.14945/00009177</a>

## 学習法から教授・学習知識へ

—— 教員養成課程専門科目における学習者の意識の変容 ——

From learning methods to pedagogical content knowledge:  
An analysis of changes in student attitudes in a pre-service course

亘 理 陽 一

Yoichi WATARI

（平成 26 年 10 月 2 日受理）

### Abstract:

This study aims to investigate changes in student attitudes in the course Methodology for EFL Learning using text mining approaches. Twenty-three first-year students, from English Education major at a university in Shizuoka, participated. The objective of this course was (a) to set own learning goals, expand their repertoire of how to learn English in theoretically-grounded ways, and formulate a plan for studying with an eye toward their graduation, and (b) to consider how to teach ways of learning English on the assumption that they will teach English to their students. In order to see the deepening of students' thoughts on these objectives, their feedback comments for each class, term papers, and two versions of their plans for studying were analyzed using KH Corder (Higuchi, 2014). The results indicated that this course could contribute to bridge between the English-user domain and the English-teacher domain for the teacher candidates.

### 1. 課題の設定

本論の目的は、1年次専門科目「英語学習法」の実践を通じて、教員養成課程序盤の専門科目における学習者集団の意識の変容を明らかにすることである。同時に、実践研究における学修成果の可視化について新たな方途を探ることを目的とする。

亘理（2013）は、Wright（2002）による教師が有すべき言語知識（使用者の領域、分析者の領域、教師の領域）とShulman（1987）の教授内容知識の枠組みに基づき、使用者の領域と教師の領域を有機的に連関させようとする実践を通じて、学生のふり返りの記述から教授内容知識形成の萌芽を示した。そこから、教科教育法や教育実習に直接関係する講義・演習がまだ先の段階の学生であっても、「報告・共有・省察のサイクルと実践的な問いや活動を組み合わせることで、教授内容知識の獲得・深化を促すことは十分可能」だと論じている（亘理, 2013, p. 39）。しかし学習者個人および集団全体の変容の過程については、質的な素描を超えるものではなく、その傾向や特徴を系統的に示すことが求められる。

学修成果の可視化の可能性を追究することは、教員養成課程の授業構成・運営上の課題の解

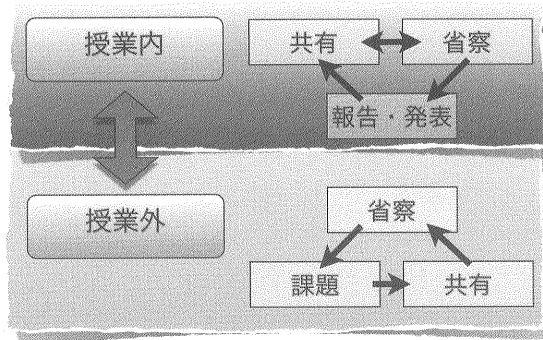


図1. 授業内外の往還のサイクル

決にもつながる。授業内のみで完結するサイクルで教授内容知識の獲得・深化を促すことは質的にも量的にも難しく、図1に示されるように、授業内外を往還させるサイクルが重要となる。担当する専門科目では、各回の授業の終わりにコメントペーパーを書いてもらい、コメントの一部または全体を（名前は挙げずに）次の授業の配布資料にフィードバックとして記載している他、課題や成果物、参考文献等の共有に学内LMSやWebページ、SNSを活用している。教科教育法のように実践を中心とする授業であれば模擬授業のビデオに対するコメント共有等が可能であるが、授業内外の適切な往還のサイクルは、特に教員養成課程の序盤においては、学生の作業負担や他の科目との連携を考慮しながら判断する必要がある。そのためにも、学習成果の可視化のアプローチを豊富にしておくことには意義があると言えるだろう。

## 2. 科目の概要と構成

「英語学習法 I」は、1年次前期の必修専門科目である。学習内容は、巨理（2013）でも述べた通り、「外国語学習の目的・学習方略・学習法に関する研究を参考に高等学校までの英語学習を振り返り、大学で英語に関連して何をどのように習得・研究するかについて模索して学習達成目標を立てること、および各スキルの効果的な学習法を具体的に学び英語力を高めること」である（巨理, 2013, p. 35）。授業目標は、次の2つから成る。

- 目標 1. 卒業までを見通した自分の英語学習達成目標を立て、理論に裏打ちされた具体的な英語の学び方のレポトリを知り、その目標達成のための英語自学計画を立案する。
- 目標 2. 生徒に英語を教えることを想定して、どのように学び方を指導したらよいかを立案する。

全体の構成および各回の授業内容は表1の通りである。本論で報告する年度の正規の履修者は23名であった。

表1. 「英語学習法 I」授業計画

授業回	授業内容	学習の括り
第1回	イントロダクション	A. 目的論・学習方略
第2回	英語学習のふり返り	
第3回	大学4年間で登りたい「山」は何か	
第4回	外国語学習成功者とは	
第5回	英文をもっと楽に、正確に、速く読むには	B. スキル別学習法
第6回	英語らしい、通じる英文を書くには	
第7回	Intelligibleな英語を話すための基礎訓練とは	
第8回	効果的に語彙力を伸ばすには	
第9回	多読に適した本を選び、読み進めるには	C. 授業での活動と 学習機会・ツール
第10回	本物のコミュニケーション活動とは	
第11回	学習ツールを使いこなすには①	
第12回	学習ツールを使いこなすには②	
第13回	留学の目的・内容、留学までと留学後	

第14回	学習の進展状況を把握・評価するには	D. 学習評価・学習計画
第15回	目標・計画の具体化	

全体の構成は、巨理（2013）で報告したものと大きくは変わらないが、変更点は次のようにまとめられる。

- B.について、その内的一貫性を高めるため、以前は数回後ろに位置していた内容を第7、8回に移動した。
- 以前の第8回「『英語コミュニケーション能力』とは何か」の内容は、第9回と第10回にまたがって取り上げた。具体的には、「コミュニケーション能力」の理論的解説は後の「英語科教育法」等に委ね、ここでは、授業において多読をただ読んだだけで終わらせないようにする活動を第9回に盛り込み、実質を伴ったコミュニケーション活動の体験そのものに重きを置いて第10回へと繋げた。
- Cについて、学習ツールを単なる紹介にとどめず、体験的・批判的に捉えられるよう多くの時間を割いた。加えて、上級生の留学体験者を授業に招き、インタビューを行う回を設けた。

### 3. 分析の観点

分析対象は、(a) 各回のコメントペーパーの記述、(b) 学期末のレポート、および(c) 第3回と第15回の学習目標・計画の記述とする。それぞれの回収率は、(a) が15回の平均で99.4%、(b) が100%、(c) が2回の平均で91.67%である。

コメントペーパーは毎回、授業の終わりに「今日の授業の疑問・意見・感想を自由に書いてください」という指示で与えられた。レポートは、字数・言語の指定をせず、「授業で取り上げたテーマのいずれかについて、個人Webサイト（www.watariyoichi.net）の『英語学習法Ⅰ』のページに挙げられた参考文献、あるいは各回のテーマに関連する任意の文献1冊以上を読み、英語学習法・指導法について所見を述べてください」という指示のもと、第15回の授業から3週間の期間内に提出されたものである。2回の学習目標・計画は、それぞれ授業内で15分程度の時間をとって記入された。第3回は、授業内で検討した文献の枠組みに沿って、卒業までの具体的な目標、今学期の具体的な目標、目標を達成するためにとる行動または方法、自分が目標を達成できたかどうかを知る方法、目標の達成を妨げる危険性のある困難点、それを克服する方法を記入してもらった。第15回はそれを見直しながら、（変更があれば新しい）卒業までの具体的な目標、今学期の具体的な目標に対する評価、目標を達成するためにとる行動または方法、2年生の終わりまでの具体的な目標・計（英語運用力、英語指導技術・理論、その他）、自分が目標を達成できたかどうかを知る方法を記入してもらった。

KH Corder（樋口，2014）を用いて、次の点について分析を行った。

- 全体の頻出語と共起ネットワーク（(a) および (b)）
- 学習の括り（A～D）のそれぞれに特徴的な語の析出（(a)）
- 授業目標1にかかわる特徴的な語の深まり（(c)）
- 授業目標2にかかわる特徴的な語の深まり（(a) および (b)）

各データの記述統計は表2にまとめられる。コメントペーパーからは、授業が進むにつれて少しずつではあるが記述量の増加が見てとれる。学習目標計画についても、前後で記述量が増

加していることが分かる。

表2. 各データの記述統計（コメントペーパーの平均は授業1回あたり，他は1人あたり）

	コメントペーパー				レポート	学習目標・計画	
	A	B	C	D		第3回	第15回
文数		1250			1008		507
段落数		325			238		287
平均字数	2141.67	2701.00	3049.60	3376.00	2138.13	124.43	194.05
標準偏差	825.15	93.53	225.96	766.50	734.23	51.34	95.32
最小	1194	2620	2712	2834	1261	50	89
最大	2701	2836	3295	3918	3678	238	397

#### 4. 結果と考察

##### 4.1 全体の頻出語と共起ネットワーク

表3は，コメントペーパーとレポートのそれぞれの語の出現頻度について，一人あたりの使用比率が1を超えるものを取り出した結果である。コメントペーパーでは，自信の学習・発表等にかかわる単語が目立つが，レポートにおいては約1.5倍の抽出語が挙げられているのみならず，指導法の観点からの具体的な記述が多く並んでいることが分かる。

表3. 出現頻度23以上の抽出語リスト

コメントペーパー				レポート					
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	345	緊張	39	英語	476	教える	47	行う	31
自分	141	勉強	39	学習	202	人	46	今	30
英語	132	大変	37	生徒	145	勉強	46	自身	29
授業	117	話	36	思う	135	身	45	小学校	29
先生	117	知る	33	授業	131	方法	45	評価	28
楽しい	83	感じる	31	自分	130	読む	43	少し	27
聞く	77	今	31	学ぶ	90	感じる	42	内容	27
今日	73	頑張る	30	教師	86	外国	41	本	27
人	66	教える	30	考える	85	辞典	41	話す	27
発表	63	読む	30	必要	78	覚える	40	経験	26
紹介	55	見る	29	先生	69	持つ	39	語彙	26
難しい	54	言う	29	英	67	大切	39	子ども	26
学習	53	発音	29	理解	64	楽しい	37	聞く	26
良い	52	使う	28	指導	55	読解	36	問題	26
生徒	50	学ぶ	27	英文	54	良い	36	形態	25
本当に	50	評価	26	使う	54	意味	34	時間	25
留学	50	面白い	26	単語	54	多い	34	正しい	25
単語	47	文	25	教育	53	日本語	34	目的	25
考える	44	本	25	辞書	52	能力	34	高校	24
曲	43	書く	24	文法	52	発音	34	知る	24
分かる	43	説明	24	テスト	51	興味	33	分かる	24
時間	41	内容	24	重要	50	言う	32	苦手	23
たくさん	40	前	23	述べる	49	文章	32		

図2および図3は、コメントペーパーとレポートのそれぞれについて、語の共起関係を出現数10以上で示したものである（集計単位は段落で、描画数は120）。円が大きいほど出現回数が多いことを表し、線が太いほど語と語の結びつきが強いことを示している。色分けされた各クラスターは、個々の授業回の内容を反映した結びつきを形成しているが、いずれも、自身の英語学習（の楽しさ）と先生・授業（の楽しさ）が学生の中で関連するものとして大きなかたまりを形成していることに注目したい。指導法の観点からレポートに多いこと、またそのネットワークは図3からも確認できる。特にコメントペーパーにおいては「緊張」「大変」といった言葉と結びついていたものが、レポートにおいては「興味」「重要」といった言葉と結びつき、楽しさと同時に難しさも感じられている様子が分かる。

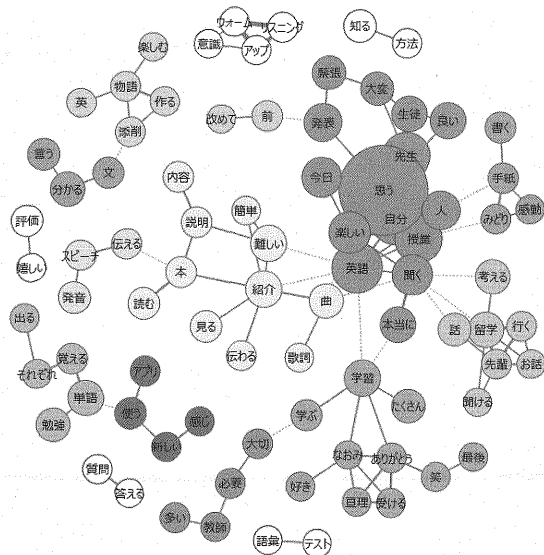


図2. コメントペーパーの共起ネットワーク

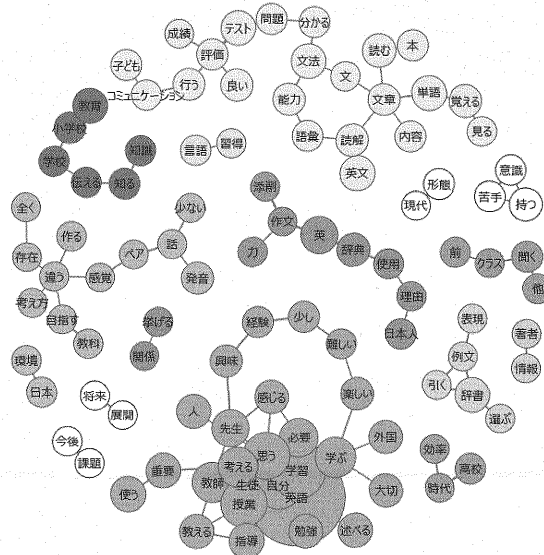


図3. レポートの共起ネットワーク

#### 4.2 学習の括りごとに特徴的な語の析出

表4は、コメントペーパーについて、表1で示した学習の括りごとに頻出上位10語を示したものである（数値はJaccard係数）。学習の括りごとに、学生の記述に特徴的な語は異なり、括りのねらいを反映した語が挙げられていることが確認できる。

表4. 学習の括り別のコメントペーパー頻出上位10語

	A	B	C	D			
発表	.132	思う	.169	思う	.188	授業	.109
英語	.085	先生	.121	英語	.098	評価	.078
先生	.078	自分	.118	留学	.087	英語	.077
自分	.074	単語	.089	授業	.085	学習	.069
感じる	.060	生徒	.068	聞く	.076	ありがとう	.064
分かる	.058	今日	.061	紹介	.073	楽しい	.062
人	.057	覚える	.057	楽しい	.063	本当に	.061
勉強	.054	楽しい	.057	今日	.056	受ける	.057
学習	.051	大変	.055	難しい	.054	学ぶ	.049
良い	.042	添削	.055	人	.049	たくさん	.043



この記述の変化を、対応分析によって整理したのが図5である。原点から離れば離れるほど特徴的な記述であることを示しており、円および正方形の大きさは記述量を示している。これをみると、学習の括りAと学習の括りDは性格的に似た記述を多く持っているということが分かる。「目的論・学習方略」について考えレポートを記述した者も、「学習評価・学習計画」についてレポートを記述した者も、授業を経て使用者の領域と教師の領域を有機的に関連させた思考をしていることが計量的にも示されたと言える。

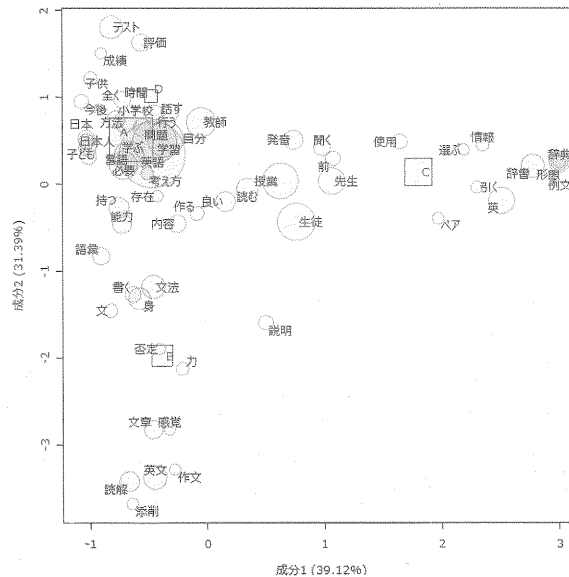


図5. レポートの学習の括りの対応分析

### 5. 参考文献

樋口耕一 (2014). 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.

Shulman, L. (1987). Knowledge and teaching: Foundation of the new reform. *Harvard Educational Review*, 57, 1-22.

亘理陽一 (2013). 「教員養成課程専門科目における教授内容知識の学習過程：『英語学習法』の実践」『The Promising Age』 30, 33-45.

Wright, T. (2002). Doing language awareness: Issues for language study in language teacher education. In H. Trappes-Lomax (Ed.), *Language in language teacher education* (pp. 115-130). Amsterdam: John Benjamins.